

## 2012 年度 小委員会活動成果報告

(2013 年 3 月 14 日作成)

小委員会名	建築企画小委員会		主 査 名：阪田弘一 就任年月：2009 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	建築社会システム委員会		委員長名：安藤正雄
設 置 期 間	2009 年 4 月 ～ 2013 年 3 月		
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<p>本委員会は、従来から設計の前段階で経済活動としての建築目標を設定する業務として認識されてきた建築企画が、成熟化・複雑化する現代社会において担うべき社会的役割の重要性が拡大していることを背景に、その望ましい実践方法について検討することを目的としている。そのために、建築企画実務者と建築企画研究者の連携を図り、最新の優れた建築企画実践例を広く公開するとともに、研究者らによる多面的な評価、理論へのフィードバックを行うことで実効性を高めると共に、社会的価値を重視した建築活動を牽引する。</p> <p>初年度： 昨年度までの活動成果である「建築・まちづくりの夢をカタチにする力」のPRを兼ねて、先進的実践例を題材とした公開見学会を行う。また、並行して成熟化社会に対応する建築そして建築企画を考える上で急務となる研究テーマおよび活動方針を検討し、研究推進のための体制づくりを行う。</p> <p>2～3年度： 昨年度に設定した研究テーマ『新たなビジネスモデルを有した社会的建築企画』に基づき、各種調査や研究会開催などの研究活動を進める。その経過や成果は、迅速にシンポジウムやセミナー、ワークショップ等の開催、また学会等での研究発表を通じて広く情報提供を行い、議論を深める。</p> <p>4年度： 3年間にわたって行ってきた研究成果をとりまとめ、実践の場で活用できるようなものとして、また、今後の小委員会活動の成果発信基盤として、ウェブを活用した継続的で双方向的な成果発表と議論の場を設けることを想定している。</p>		
委員構成 (委員名 (所属))	<p>委員公募の有無：無</p> <p>木多彩子 (摂南大学) 飯田匡 (大阪大学) 上田正人 (阪急コンストラクション・マネジメント) 田中直人 (鳥取大学) 江本達也 (大鉄工業) 柏原士郎 (大阪大学・武庫川女子大学名誉教授) 佐々木正人 (竹中工務店) 中村洋平 (竹中工務店) 高田光雄 (京都大学大学院) 高井宏之 (名城大学) 所 千夏 (アトリエ CK) 萩原正五郎 (元大林組) 林弥寿子 (関西電力) 阪田弘一 (京都工芸繊維大学) 生川慶一郎 (京都市住宅供給公社)</p>		
設置 WG (WG 名：目的)	<p>ビルディングエコノミックス WG：</p> <p>小委員会の活動の中で、特に、現在のストック活用社会に注目し、ストック活用社会における企画から運営に至る一連の建築活動を円滑に行うための基礎資料の作成を目的とする。</p>		
2011 年度予算	60000 円	<p>ホームページ公開の有無：有 委員会 HP アドレス：<a href="http://news-sv.ajj.or.jp/keizai/kikaku/">http://news-sv.ajj.or.jp/keizai/kikaku/</a></p>	

項 目	自己評価
委員会開催数	3 回 (年度内計画を含む)
刊行物 (シンポジウム資料等は 除く)	なし
講習会	なし
催し物 (シンポジウム・セミナー・研究会・見学会等)	1. 11 月 (日本建築学会近畿支部経済部会と共催) 梅田阪急ビル建て替えプロジェクト見学会 参加者数 20 名

大会研究集会	なし
対外的意見表明・パブリックコメント等	なし
目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)	<p>達成度 70%程度</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 活動計画に則って、小委員会・見学会を他団体との共催で行った。</li> <li>2. 課題であった研究活動資金(科学研究費)をこれまでの活動蓄積をもとに獲得することができたので、そのための調査研究活動(事前不確定性を前提とした動的な建築企画実務プロセスの体系化)に着手した。</li> <li>3. ウェブを活用した活動成果発信メディアの作成に着手した。</li> <li>4. 来年度からの活動の柱の1つとしての、数年後の出版計画を見据えた活動を進めるためのWGを設置(予定)。</li> </ol> <p>2～4の試みに関してはまだ着手段階ではあるが、来年度以降の新体制による活動を活性化するうえでの基盤は築けたと考える。</p>
委員会活動の問題点・課題	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 研究・見学会などの成果を発信する方法として、ウェブを活用した継続的で双方向的な成果発表と議論の場の運営と、WGの効果的な運営を進めること。</li> <li>3. 効果的な予算および研究資金活用により、委員会活動の学術的活動としての側面を強化すること。</li> </ol>